

備前市立三石小学校

キーワード

2 基礎的な知識・技能の習得

標 題

基礎学力（四則計算・新出漢字）の定着を図る指導方法の工夫

①学校の概要（平成25年7月15日現在）

・児童生徒数 81名 ・学級数6学級 ・教職員数14名

②取組を始めた経緯

過去の全国学力テストや各学年実施の教研式学力テスト等の分析結果から、複数の学年において、学力に二極化の傾向がみられ、すべての子どもたちに基礎学力の定着を図る必要があると考えた。そこで、まず、学年相応の漢字が読み書きできたり、四則の計算が正確にできたりすることを本校学力向上プラン（3つの柱の1つ）として重点的に取り組むことにした。

③取組の実施体制

学力向上担当（教務主任）と分かったプラン担当（教諭2名）がプラン会議を行い、起案（校長・教頭へ）後、全員で協議をし取組を実施している。

④学力向上に向けた具体的な取組

○朝の学習時間（8：15～8：30）の活用

朝の学習ぐんぐんタイムとして毎週火曜日を漢字学習の時間、金曜日を計算学習の時間として位置づける。全学年がプリントやドリルなどを活用して、漢字・計算力の向上をめざして、計画的・継続的に取り組む。

○全校テストの実施（朝の学習時間を活用して）

全校漢字テストを学期2回（年間6回）、全校計算テストを学期1回（年間3回）実施する。子ども全員の点数をデータ入力し、学年の平均・個人の点数の推移をみることができる。

テスト前2週間をプレ期間として、宿題に類似問題を出したり、自主学習の一つとして取り組んだりするように全校で取り組んでいる。

100点の子どもには、校長から満点賞のオリジナルカードがもらえ、子どもたちは、全校漢字・計算テストに意欲的に取り組んでいる。

学校便りや学年通信で、保護者にも学校の取り組みや子どもたちの成果を伝え、理解と協力を得ている。

○個に応じた課題の準備（高学年）

高学年では、自分の苦手とする計算分野を選び、学級のパソコンからプリントアウトできるようにしている。自主学習の一つとして子どもたちは、自分の必要とする計算練習に励むことができるようになった。

○ミニテストの活用

漢字・計算などのミニテストや頭の体操（基礎的な計算をウォーミングアップとして）を授業に効果的に取り入れている。（短時間で、実施）継続的に定着するまで行うので、努力の成果が点数に表れやすく、子どもたちが意欲的に取り組んでいる。

○夏休み算数教室の実施（4日間、3～6年実施）

教員と地域ボランティアで、個に応じた計算力の向上をめざし、本年度から学年の枠にこだわらずに、たしざん・ひきざん・かけざん・わりざんの4つのコースに分けて実施する。（昨年度までは、各学年別で内容を決め実施）

⑤取組の成果と課題

児童一人一人が、全校漢字・計算テストをがんばろうという目標をもち、取り組むことができたので、全学年とも平均点が85点以上を達成することができた。

今後は、新出漢字をただ覚えるだけでなく、文章の中で使ったり、用例を覚えたりできるようにしていきたい。

四則計算では、自分の苦手な計算が正確にできるように個に応じた復習をさらに徹底して行うことができるようにしていきたい。

⑥取組の継続・発展の要因

学力向上プランについて校内研修の時間を取り、本校の課題と取組の必要性を全教職員で共通理解しているため、取組を継続・発展させることができていると考える。また、校務分掌の中に分かったプラン担当（2名）を位置づけ、より効果的な取り組みになるように学力向上担当（教務主任）と連携を図りながら、改善策や発展的な取組などの提案を行っていることも要因の一つであるといえる。

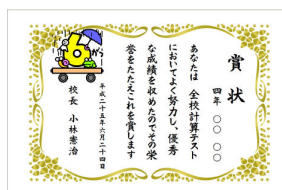
⑦管理職・中核教員等のアクション

管理職は、学力向上の取り組みを中核教員（学力向上担当・分かったプラン担当）に立案を指示し、全教職員理解のもと全校の取り組みとして実施できるようにしている。また、それらが有効な取り組みになっているか、適切に評価している。

具体的な取り組みでは、全校漢字・計算テストにおいて、校長は、個人のデータをもとに満点賞を出し、子どもの意欲付けを図っている。また、教頭は、テスト開始・終了の合図を、校内放送を用いて行い、全校一斉にスムーズに全校テストが行えるようにしている。

⑧資料・写真等

（校長賞（満点賞））



（全校テストに意欲的に取り組む児童）

